

随筆



英国湖水地方紀行

ーナショナル・トラスト
誕生に思いを馳せてー

中山外科胃腸科医院
中山 良有

表紙の写真は英国で最も自然が美しい所とされている湖水地方の5月の風景のひとつである。

詩人のワーズワースが終生詩作に耽けり、絵本作家ビアトリクス・ポターのピーター・ラビット物語の舞台になったところである。

マンチェスターの少し北方、スコットランドに近いところにあり、緯度は樺太のほぼ北端に位置するが、西側と南側はアイリッシュ海に面し、偏西風と暖流の影響で気候は比較的温暖という。日焼けする位日差しは強いが、ウインダム湖遊覧船上の風は冷たくウインドブレーカーが必要であった。美しい大小の氷河湖が多数(約16)散在し、水辺では白鳥や鴨などの水鳥たちが悠々と泳ぎ、そして空を乱舞している。ヒトが近づいても逃げようとしなない。ツアー仲間の女性たちはガイドからもらった餌を鳥たちにやって喜んでいる。すべての動植物が大自然とともに共生しているのだ。歩道の縁や湖畔には色とりどりのチューリップや名も知らない草花が競い合うように咲き乱れている。ワーズワースは詩情豊かなこの地で生まれ、ケンブリッジ大学遊学中以外はほとんどの生涯をこの地で過ごし、桂

冠詩人にまで登りつめたのち、この地で亡くなった。ワーズワースが晩年をすごしたダイダル・マウントの居間や書斎が当時のまま残されており約200年まえのワーズワースの生活が偲ばれた。ピーターラビットの舞台になったヒルトップ農場は5月の陽光をいっぱいにあびた木々の花が咲き誇り、草花が生い茂っていた。草むらから今にも絵本の主人公の小動物たちが飛び出してきそうな雰囲気だ。最近の映画「ミス・ポター」でもビアトリクス・ポターの生涯や湖水地方が紹介された。“英国にはヒルはあるが、マウンテンはない”と言われているように、スイスやオーストリアのような高い山はまったく見られない。少し高い山も地層が岩盤のため樹木は生育せずやや荒涼としている。なだらか緑の丘陵が幾重にも重なって果てしなく遠くまでよく見渡せる。時々黄色の菜の花畑が車窓いっぱい目の前を遮るが、緑の芝生に覆われたゴルフ場のような牧場が延々とどこまでも続き、牛や羊、馬たちがのんびりと草を食んでいる。牧場の境界を表す石垣がまるでミニチュア万里の長城のように縦横にはるか頂上まで伸びている。目障りな看板や電信柱、商業施設は特定の限られた場所以外ではほとんどみられない。この地方は大昔は「ヒースの咲く荒れた土地で、恐ろしいところ」だったらしい。このような荒野が今のような美しい緑豊かな田園風景になったのは幾世紀にもわたって人知という鋤で根気よく開墾し、そして開発という自然破壊から守ったから存在するのだという。



ウインダム湖



ワーズワースの住居



広大な田園風景

湖水地方のこのようなすばらしい自然を環境破壊から保護できたのは、幾人かの先見性のある賢人たちの献身的な努力があったからだということを今回の旅行で始めて知った。産業革命後の英国にあって、開発の波がこの地方にも及ぼうとしたとき、ワーズワースや有名な芸術評論家ジョン・ラスキンらはこの湖水地方の開発と都市化に猛烈に反対した。後年、「自然は人と共存し、人間の心を癒すもの」というワーズワースの自然観に啓発された弁護士ロバート・ハンター、建築家のオクタヴィア・ヒル、牧師のハードウィック・ローンズリーの3人が「ナショナル・トラスト」という民間の環境保護団体を創立（1895年）する。ナショナル・トラストは次世代にあるがままの自然を残すには、「土地を買い取り、所有するのが最もよい」の理念のもとに景勝地や歴史的建造物、庭園、森林、村落などを市民の寄付や寄贈によって次々と取得していった。この湖水地方はほとん

どが国立公園であるが、1/4はナショナル・トラストが所有していてかたくなまでにあるがままの自然を残そうと努力している。

今では英国ナショナル・トラストは沖縄県全土よりやや広い2,500K m²の土地、約1,120Kmにおよぶ自然のままの海岸線、1,000棟の歴史的建造物などを取得して自然を保護し、文化遺産を後世に残すのに貢献している。350万人の会員と、年間4万人以上に及ぶボランティアの協力を中心に運営されている。英国政府もナショナル・トラスト法を制定して保護資産の非課税など多くの特権を与え保護している。この理念はやがて世界に広まり、ユネスコの「世界遺産」に継承されていくのである。湖水地方は自然保護運動の聖地として長く人々の記憶に残るだろう。日本ナショナル・トラストも存在するが、英国ほどの活動はしていない。沖縄の経済発展のためにはある程度の自然破壊はやむをえないとしても、どのあたりでバランスをとるか、そろそろ県人の深い思慮と毅然たる行動が求められていると思われる。

最後にナショナル・トラストを日本に初めて（1965年）紹介した作家大佛次郎の無思慮な景観破壊を戒めた言葉を紹介する。「過去に対する郷愁や未練によるものではなく、将来の日本人の美意識と品位のためである」。

参考文献

「英国ナショナル・トラスト紀行」（小野まり）

「ナショトラ・キーワード辞典」

（日本ナショナル・トラスト協会）

原稿募集！

随筆のコーナー（2,500字以内）

随時、募集いたします。日常診療のエピソード、青春の思い出、一枚の写真、趣味などのほか、紀行文、特技、書評など、お気軽に御寄稿下さい。



**ある内地の病院
午前4時の救急室**

国立病院機構 沖縄病院
樋口 大介

その日男はいつもの消化器科外来と内視鏡の仕事を終え、病棟の仕事をしていた。夕方5時15分、コンビニエンスストア化した救急室から早々と当直コールされた。その後も忙しく救急車5台の対応と屈辱的コンビニ外来に追われ疲れはてて当直室でうとうととしていたら、いまましい携帯電話がなった。午前4時か。こげた目玉焼きをフライパンからはがすように起き上がる。「あー、もすもす。」すでに舌が回らないし小さい声しかでない。「患者さんお願いします。」またあのイヤミな看護師だ。声とねちねちした言い方でわかる。今日は負けの日だ。色川武大が「よい勝ちを得るには負けの日は思い切り負けたほうがいい。」と書いていた。皺だらけだった生地がなくなり、汗と臭気でポツリと重くたれさがったグレーの白衣を羽織り、救急室によれよれ状態で到着。到着した看護婦たちは男を見ない。向こう向いている。救急室のブースにはいり、「出川さん、1番へどうぞ。」20歳ぐらいの青年だ。男はそいつが自分より元気だと即座に診断した。後ろから母親と父親らしき人が入ってきてのたまふ。「咳が出て、熱もあるんですけど。」とわが子について説明し始める。ありえない。こいつは小学生か。男は怒りで自分を見失いそうになりながら、風邪薬を出した。カルテも書き終えたあと帰り際に母親が追加してほしいと言ったSPトローチを怒りで震える手を抑えながら「これ処方しときました。」と告げる。しかし看護婦は依然、男を見ない。当直室に帰りベッドに倒れこんだときを見計らって（そうにちがいない）「先生もう一人来ました。」との連絡あり。深刻そうな49歳女性、「先生眠り薬が切れて眠

れないんですが。」「なんで昼間に来ねーのよ。」男はのど元まで来ている言葉を飲み込む。「んー薬出しとくから。」左隣のブースでは小児科の先生がしたたかインテリお母さんを相手に懸命に説得工作をつづけている。男は小児科の先生はどうしてあんなに丁寧にお母さんに説明できるのかいつも感心する。気の短い自分が小児科医になっていたら数日で病気になっていただろう。話好きな性質がないとおそらくやっていけないのではないだろうか。そしていい人たちだと思う。右隣のブースでは忙しそうに働きつづけていた産婦人科の先生が、若い夫婦ともめている。その先生は大分前からとげとげした口調になっていた。男はイラついているのは自分だけではないんだというある種の連帯感を感じていた。その先生は何か気にさわる一言をいってしまったのか、ぶちきれた患者の旦那が「何だその言い方は、ちゃんと診ろ、こらー」と巻き舌で怒鳴られ、「そこのめがねの看護婦何見てんだ、こっち来いこらー」「こっちへ来い、そのめがね。」と殴りかからんばかりにすごんでいる。修羅場と化した救急室、その連帯感の先生を男はあっさりと置き去りにして、そそくさと悲鳴と怒号の鳴り響く救急室をあとにした。そのまま一睡もしないまま外来突入。新患、予約患者ごちゃ混ぜのため、いくらがんばっても常に10人ぐらい待っている。廊下でいらつく患者がため息をしたり、カツカツ貧乏ゆすりをしているのが聞こえる。男も気が短いので患者の気持ちはよくわかる。結局、朝飯、昼飯も食えず。缶コーヒーだけ飲んだ。眠い。膀胱がパンパンになってきた。腹がごろごろなりだした。下痢しそうだ。男は結構ストレスで下痢しやすいし痔も出やすく結構出血する。その患者は心身症患者、ドグマチールの威力で、ストレス性の嘔気がびたりと止まって、男に対する深い信頼をよせる38歳男性だ。気持ち悪いぐらいに男のことを気に入っており愛情すら抱いている恐れがあった。その訴えは長く、多岐にわたる。かすかに残ったエネルギーをその患者に吸収されているときに男は網蝨としながら

ふと思う。そういう本当に精神的にあるいは肉体的に弱い患者たちによって逆に医師としての自分自身が生かされているのではないかと。本当に人から必要とされること、そこに医師としての自分の居場所があるからだ。どの病院でも看護師から恐れられていた男は心身症患者だけにはなぜかやさしいと言われていた。面の皮の厚い看護師にだけはめっぽう厳しかった。しかし今はそれどころではなかった。冷や汗をたらしながら便所に急ぐ、引いては寄せ、引いては寄せていた便意の波はいまや便所に近づくとつれて巨大なうねりとなり加速度を増している。心身症患者に必要以上に優しくしすぎてしまったと思っても後の祭り。便所のドアを開いてズボンとパンツを一気に下ろした瞬間にすぐ排出する予定が、パンツが一瞬ひっかかった。ああっ・・・男は情けなくて泣きそうになった。いや泣いた。そして午後5時で外来患者

診察をノーパンのまま終えた。その後甘くてまじい缶コーヒーを胃に流しこむと、内視鏡室で ERCP 2 例が待っていた。ひとり終了した直後、廊下に走りだして嘔吐した。まさに缶コーヒー嘔吐だ。いまはやりのウイルス性胃腸炎に違いなかった。ERCP あと 1 例、やってやる。疲労、不眠、脱水で這うように家に帰った。男は毎日、朝起きて働いてふと気がつくとき夜の道をとぼとぼ歩いていることが多い。この繰り返して自分にわずかに残された人生の時間が指の間からどんどんこぼれ落ちていくと感じていた。心はすさみ、下半身がやけに寒かった。遅い夕食をとり、シャワーをあびて今まさに寝ようとしたとき携帯がなった。胆石膵炎疑いで ERCP しに来てほしいとのこと。男はタチの悪いヘリコバクターピロリが、胃上皮化した十二指腸粘膜の粘液を食いつくし、深い潰瘍を掘り始めたのを感じた。





古文書に見る「聖なる菩提樹」の歴史（前編）

長嶺胃腸科内科外科医院
長嶺 信夫

1. はじめに

インドのブッダガヤには2500年前ブッダ（御釈迦様）がその樹の下で悟りを開いたといわれている「聖なる菩提樹」の末裔があり、現在マハー・ボディー寺院（大菩提寺）とともに世界遺産に登録されている（写真1、2）。

菩提樹の歴史に関して、筆者はインド大菩提協会サラナトセンターから菩提樹の分け樹を贈呈された後、沖縄県医師会報にかなり詳しく報告したが、釈迦成道の地であるブッダガヤの菩提樹についてはより詳しく知りたいと思い、調査を続けてきた。

この菩提樹は釈迦入滅後多くの試練にあっている。今回手元の資料をもとにその盛衰を記してみることにした。

釈迦入滅後の紀元前3世紀、アショーカ王

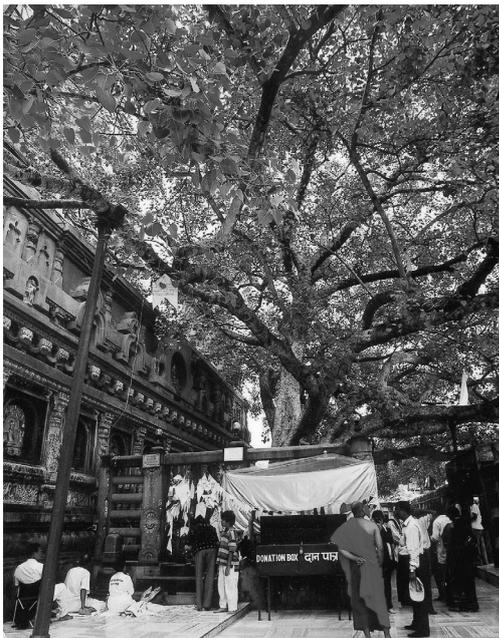


写真1. ブッダガヤの大菩提寺・大塔横に立つ「聖なる菩提樹」。樹齢約130年。柵の中に金剛法座がある（2003年7月撮影）。



写真2. 菩提樹の樹根と金剛法座。大塔の壁面には如来像を中心に13個の仏像が安置されている（2003年7月撮影）。

（在位紀元前268～232頃）が、古代インド・マガダ国マウリア王朝3代目の王として即位した。王はその後カリンガ国に遠征し、大苦戦の末にのべ10万人が死に、15万人が捕虜となり、それに数倍する人々が戦禍を受けたというカリンガ戦争を経験している。王は戦争の悲惨さに深く後悔し、戦争の勝利よりも法（仏教によるダルマDharma、全世界の普遍的な理法と道徳）の勝利を信じ、その後熱心な仏教徒になっている（大西・岩瀬編：図説インド歴史散歩）。

2. 「大唐西域記」の記録にみる菩提樹の盛衰

古の菩提樹に関して詳細に記録されたものに西暦629年から645年にかけて西域（インド、中央アジア）を訪問した玄奘三蔵の「大唐西域記」がある。玄奘三蔵は西暦637年に大菩提寺を訪れているのだが、その中に「昔、仏の在世中には（菩提樹は）高さ数百尺であったが、しばしば伐採されてもなお高さ4、5丈ある。」と記載し、それに続いて、菩提樹の受難の記録がある。少し長くなるが水谷真成訳注の大唐西域記から転載する。

「如来寂滅のあと、無憂王（アショーカ王）が初め即位した時には邪道を信仰し仏の遺跡を破壊した。軍隊を動かし自ら臨んで菩提樹を伐採し、これを寸断してその西数十歩の所に積み上げ、事火婆羅門にこれを焼いて天を祀らせた。煙や炎がまだ静まらないうちに2本の樹が生えだし、猛火の中で葉を茂らせ緑を含ませた。無憂王はこの異変を見て自らの過ちを後悔し、香

乳を残りの根にそそぎかけたところ、翌朝になると樹はもとのように生えていた。王はこの不思議なでき事を見て重ねて深く喜び、自ら供養を修し、楽しんで帰ることを忘れるほどであった。

王妃はもともと外道を信じた人で、こっそり人を遣わし、夜半過ぎに重ねてその樹を切らせた。無憂王は朝方に礼拝しようとする時唯切り株だけであったので非常に悲嘆した。そこで心をこめて祈請し香乳を灌ぎかけたところ、日ならずしてもとのように生えてきた。王は深く心を打たれ、石を積み上げて垣を周らした。その高さ十余尺で、今もなお存在している（第8巻6・3）。と記載している。アショーカ王妃が菩提樹を切り倒させたことは中国僧の「法顕伝、第4章」にも記載され、アショーカ王妃が王の不在の時にこの菩提樹を切り倒させたが、アショーカ王が牛乳を多くかけさせたので樹が再生した、という。

また、玄奘三蔵が西暦637年に菩提樹を訪問する少し前に、シャシャーカ王が菩提樹を伐採させた時の様子を「近ごろ、設賞迦王（シャシャーカ）王と言う人が外道を信仰し、仏教を排斥し僧伽藍を破壊した。この菩提樹を切り、根もとを掘って水脈の所まで至ったが、根を掘り尽くせなかった。そこで、火を放って焼き、甘蔗の汁をかけ、その根を爛れさせ、残りの芽を根絶してしまおうとした。数ヶ月の後にマガダ国の補刺拏伐摩王（プール・ナヴァルマン王）がこの人は無憂王の末孫であるが、この話を聞き、『仏陀がすでにこの世を去られ、唯仏の樹を残すだけであったが、今さらにこの樹も切られてしまったら、衆生は何を見たらよいのだろうか』と嘆き、体ごと地面に投げ出し悲しんだが、その悲しみの心は物をも感じ動かすほどであった。そこで数千頭の牛の乳をしぼりそそいだところ、一夜過ぎると樹が生え、その高さ一丈余りになっていた。後の人が伐採するのを心配して、周囲を石垣の高さ二丈四尺のもので取り巻いた。それで今の菩提樹は石の壁の中に隠れ、一丈余だけが上にでていのである（大唐西域記、第8巻6・3、水谷真成訳注）。と。

このシャシャーカ王による菩提樹伐採事件は西暦7世紀初頭に起こったといわれており、その後、シャシャーカ王がハルサ・ヴァルダナ王（戒日王、Harsha Vardhana 王）によって滅ぼされた後の紀元600ないし620年頃、プール・ナヴァルマン王（Purna Varma 王）によって再建・植樹された。再建・植樹は元の地盤に25フィート（8メートル余）の高さまで盛土して、その周りに石垣で塀を築き、その上に菩提樹を植えたと考えられている。

3. スリランカの歴史書「マハー・ヴァンサ（大史）」の記録

「大唐西域記」の記録は中国の“白髪三千丈”の表現にみるように極めてオーバーな表現であるが、アショーカ王などが菩提樹を伐採したのは歴史的事実のようで、西暦5世紀に編纂されたスリランカの歴史書、「マハー・ヴァンサ（大史）」にも、アショーカ王が仏教にあまりにも熱心で王妃をかえりみないのを嫉妬して王妃が菩提樹を枯れ死させた様子が記載されている。

その中には「かの容色を誇りとする愚かな者は、『この王は、妾よりも大菩提樹の方を崇められる』と怒りの力に引きずられ害心を抱き、マンドゥ樹の刺の方法を以て、大菩提樹を枯死せしめた（第20章）。」と記載されている（平松友嗣訳注）。ここに用いられているマンドゥ樹の刺はこれを刺せば植物は枯死すると信じられているという。

ところで、これら古文書の記載ではいとも簡単に樹が再生している。しかし、このことは必ずしも誇張ではない。育ててみてわかることだが、インドボダイジュは生育が極めて旺盛な樹で、幹を切断してもその場所から容易に芽がでる。鉢に植えた菩提樹の植え替えをした時、鉢の底の水抜き穴からでた根を切り取り放置していた残根（根先）からも新たに芽が出てきたのには驚かされた。従って、アショーカ王や王妃、シャシャーカ王の指図で切り倒された菩提樹の切株や残根から樹が再生したことは十分考えられる。

4. イギリスの考古学者カニングガムの記録による菩提樹

このように釈迦入滅後、菩提樹は度々伐採され、その都度再生し、または植えつがれてきているが、イギリスの考古学者カニングガム (Alexander Cunningham) が書いたブッダガヤのマハー・ボディー寺院 (大菩提寺) の発掘調査報告書のなかにも菩提樹の受難の記録がある。

カニングガムは、1880年にブッダガヤの寺院遺跡を発掘していた時、露出した状態で発見された金剛法座のすぐ西側の土を掘り起こし、現在の菩提樹が立っている位置より30フィート (9メートル) 下の砂質土壌の中から菩提樹の二つの木片遺物を発見、この場所の上に建っている寺院後方の大きな「ささえ壁」が12世紀以降のものであることから、この木片遺物が西暦600ないし620年頃シャシャーンカ王によって伐採された菩提樹の一部である可能性が高いと報告している。

興味深いのは、現在の菩提樹は金剛法座の外側 (西側) に生えているが、発掘時の図面をみると、菩提樹は金剛法座の内側で大塔のテラスから金剛法座の上を外に向かってはえている (図1)。余談になるがアショーカ王が最初に大

菩提寺を建てた時は金剛法座と菩提樹を中心に、その周りに柱を建てた開放的なパヴィリオンだったようで、その後、法座と菩提樹が寺院の中から外に移動されたといわれている。

また、菩提樹に対する危害に関しては、シャシャーンカ王の事件以外にも、「紀元1世紀にインド西部のHunimanta王がマガダ国に侵攻し、寺院を破壊したというTaranathの記録があるが、その時、菩提樹も破壊をまぬがれることはできなかったであろう。」と記載している。また一般には12世紀末から13世紀初頭にかけて、イスラム教徒の侵攻の際、寺院とともに菩提樹にも危害が加えられたにちがいないと言われているが、カニングガムは「イスラム教徒がペシャワールで有名な樹に危害を加えなかったので、聖なる菩提樹には危害を加えなかった可能性もある。」と記している。

その一方、「菩提樹は生長が早く、寿命が短い樹なので、種から生えた新鮮な樹によって、アショーカ王の時代から現在に至るまで、12回、15回、いや20回にもわたって植え継がれたにちがいない。」とも述べている。

後編は会報3月号へ掲載します。

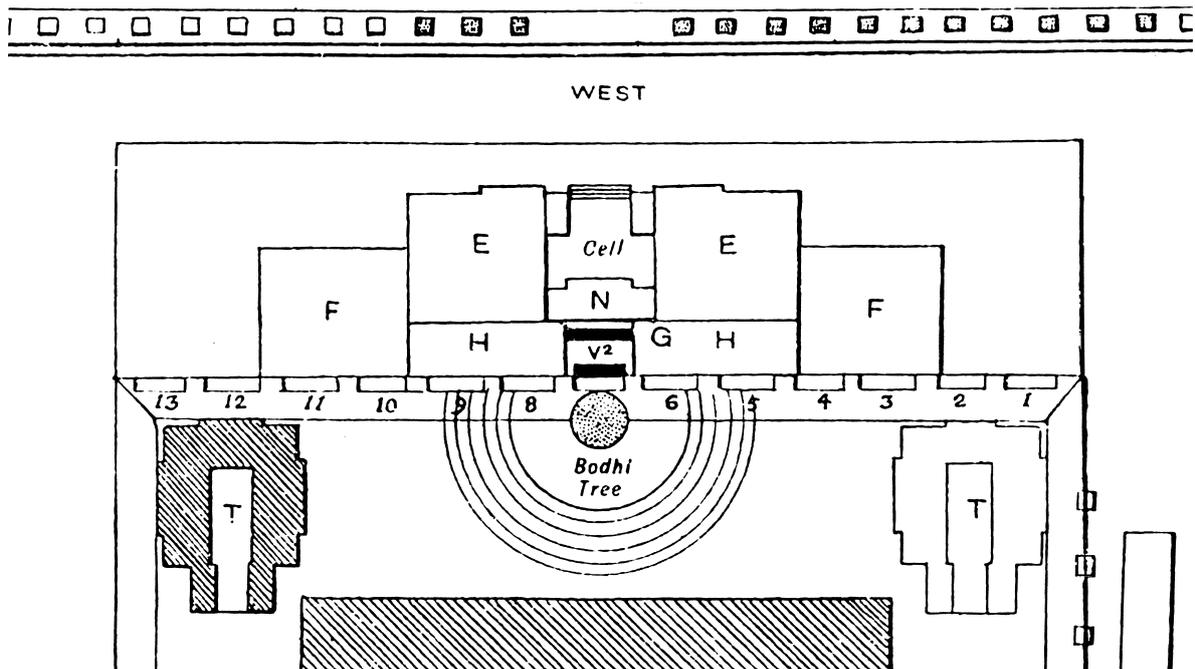


図1. 発掘調査時の大菩提寺の模式図の菩提樹側部分。E,F,Hは大塔の後壁 (菩提樹側) に追加建造された巨大なささえ壁、V2は金剛法座、Nと黒ぬりの壁 (G) は外壁中央の如来像を隠すため設置された壁。菩提樹が大塔のテラスから金剛法座の上を外にのびている。現在はこれらの付加建造物はすべて撤去されている。文献5の図から部分転載。